

教師の集団的力量は？

NIWA 教育相談室にて不登校相談を受けていると、どうも公教育としての学校がおかしいと思うことがよくある。

先日もさいたま市の公立中学校の卒業式で、不登校が続いていた卒業生が会場となった体育馆の2階ギャラリー（渡り廊下のような狭い空間）で式に参加することとなり、教師の案内が不十分であったために椅子ではなく平均台に腰かけての参加という出来事があった。ギャラリーでの参加は本人も保護者も同意していたらしい。メディアは椅子ではなく平均台に座らせたことを配慮のない指導と問題視し、教育委員会の指導を受けて校長は謝罪した。

しかし、問題は平均台ではない。なぜ2階ギャラリーでの参加なのか。生徒は卒業式では卒業証書を受け取ったのか。1階の卒業生の最後尾に席を設けることはできなかつたのか。保護者と本人にどんな説明をして同意を得たのか。と教育的配慮のなさが疑問として次々と浮かび上がる。教育的配慮と言えば、不条理な校則を問題と感じながらも、教師が積極的に見直ししようとせず、今もくすぶり続けているのはなぜか？

この問題は教師ひとりひとりの資質を問うているのではなく、教師の集団的教育力量の問題を示唆している。教師集団は自ら研修を重ね、集団論議にて指導方法を模索してきた長い歴史があった。その議決機関は紛れもなく職員会議である。ところが、この職員会議が形骸化し、議論の場と言うより指示伝達・承認の場へといつの間にか変貌してきてているのが現実である。それは1980年代にさかのぼる。

1980年代、文科省指導の愛国心の名のもとに日の丸・君が代の指導が学校現場で厳しさを増したとき、革新系都道府県での職員会議は対立し大荒れした。教師集団は日の丸・君が代指導の強制に反対をしたが、最終的には校長の職務命令の発令で、卒業式などで国旗掲揚・君が代斉唱は実施された。園遊会で東京都教育委員を務める米永氏が、「日本中の学校で国旗を掲げ、国歌を斉唱させることが私の仕事」と言ったとき、当時の天皇陛下は「強制はいけませんよ」とたしなめている。しかし、学校現場は校長のトップダウンによって、実は強制を続けてきたのである。大阪では君が代斉唱の際、教職員の口パクをチェックする指示をしたのも校長であった。この時期から学校組織に明らかな上位下達の体質化が始まったようだ。

不登校の生徒にどう寄り添い指導するのか、卒業式はどのように挙行するのか、日常的に教師集団が知恵を出し合い、集団的に論議することで生徒が主人公の教育実践は展開され、確かな教育的配慮はここから生まれるはずである。

教育現場にトップダウンは馴染まない。むろん豊翔高等学院にトップダウンはない。

(丹羽 豊)